

# 英語の社会学的考察

小 栗 敬 三

## NOTES ON “U” AND “NON-U” OF ENGLISH

Keizo OGURI\*

### SUMMARY

Two essays by Prof. Ross, “U and Non-U : An Essay in Sociological Linguistics (1956)” and “U and Non-U Today (1968)” are very interesting and instructive, full of linguistic material new to the readers, especially, of foreign countries. The terms “U”, which means usages of the “upper class”, and “Non-U” (not upper class) have come into general use. As for American English, Prof. McDavid’s “Some Social Differences in Pronunciation (1951)” is as informative as Prof. Ross’s articles.

Without these essays I could never have written my paper, which, accompanied by some references to the Japanese language, is simply a brief record of what I have learned—“linguistic class-indicators” of British and American English. Prof. Ross says that “Among European languages, English is the one most suited to the study of linguistic class-distinction.” Japanese, I presume, is richer than English in linguistic phenomena (“isō”, in Japanese) in which words present many kinds of aspects according to various reasons and circumstances—for instance, a great difference between the written and the spoken Japanese, distinctive features of male and female (usages of) words, and numerous occupational terms.

### 1

本稿では Ross<sup>1)</sup> 教授の “U and Non-U : An Essay in Sociological Linguistics” と、その続編の “U and Non-U Today”<sup>2)</sup> を中心として、範囲を英語 (単語・発音) に限定して、現代英語 (米語) における “linguistic class-indicators” について、一つの考察を試みたいと思う。

以下 Ross 教授の説を述べる。

---

\* 英語教室 (Dept. of English)

- 1) Alan S. C. Ross (1922- ), 英国 Birmingham 大学, Professor of Linguistics. *Noblesse Oblige* (Hamish Hamilton 社出版, 1956 年) 中の論文。Max Black 編 論文集, “The Importance of Language” (1962 年) (p. 91-106) 中に再収録。“linguistic demarkation of the upper class” 論であって, “habits of speech peculiar to the lower class” は取り扱わない。
- 2) 英国の週刊紙 “New Society” (1968 年 8 月 22 日) に掲載。

“U”は (usages of the) upper class「上流階級 (の用法)」を表わし、形容詞的用法では correct, proper, legitimate, appropriate などと同義である。これに対して “Non-U” は not upper class であり, incorrect, not proper, not legitimate を意味する。この論文の発表以来, ‘U’, ‘non-U’ の名称が一般に用いられるようになった。

(注) 1. 昨年筆者は新刊の Jones 発音辞典<sup>1)</sup>を点検して “theatre” の項で [θiéta] を見出して、少々驚いた。最初に出してあるのは従来通り [θiɛtə] であるが、前の 12 版 (1963 年) では第 2 が [θjɛ:tə] であった。a に stress があるこんな発音があるのかと疑って、同僚の Harry Guest 氏 (英国人, Cambridge 大学卒業, 詩人, 英文学者) に質問すると、即座に “non-U” と答えた。この術語が広く用いられていることを改めて認識した次第である。

2. 同僚の native speaker の教示に関連して、数年前の英国人教師 Herbert 氏の言葉を思い出す。『Jones の発音辞典』という本があることは前から知っていたが、見るのが (日本で) 今が初めてだ。日本の学習者にとっては「発音の神様」のような存在 Dr. Jones も彼にとっては一人の学者にすぎないのであろう。英国で生まれ育ち、本国の大学で英文学を専攻した自分の発音は標準 (に近いもの) なので、発音辞典は必要としないのだ。一般平均的日本人が日本語の発音辞典を使用しないのと同じである。特別な人だけが「日本語アクセント辞典」を引くのである。

第 2 の論文では見出しに次の文がある。

Some new U-indicators have developed; some old ones died. But the language barrier across the classes is as strong as when it was first described.

米国においては英国ほどの階級の差はないとしても、文化・教養・貧富の差による上・下の階級の差があり、U と non-U はかなりの程度まであてはまるであろう<sup>2)</sup>。

Among European languages, English is, surely, the one most suited to the study of linguistic class-distinction. (Ross)

ヨーロッパの言語のうちでは英語が speech level [levels of usage] の種々な様相を示す点で最も特色があると考えられているが、ヨーロッパ以外の大陸の言語と比較したらどうであろうか?

この点では日本語は英語よりもっと複雑な姿を示しているのではないだろうか。国語学でこの問題を取扱うのは位相論<sup>3)</sup>である。

位相とは言葉が種々な理由で異なった姿を生じている現象をいう。社会が複雑に分化するにつれ、各その分野に独特の言葉 [位相語] ができる。

- 1 方言。地域方言と階級方言
- 2 文語, 口語
- 3 男性語, 女性語

1) Daniel Jones: *English Pronouncing Dictionary*. 13 版, (1968 年) edited by A. C. Gimson 以下の記述で、単に「Jones」と略す。

2) 本稿では米語について Raven I. McDavid: *Some Social Differences in Pronunciation* (Applied English Linguistics, edited by Harold B. Allen, p. 174-185) に負う所が多い。“Linguistic Atlas of the United States” を中心に、大西洋岸地帯の記述がくわしい。

3) 国語学会編, 国語辞典。

(注) 小説「我が輩は猫である」は英訳されて、その title は「I Am a Cat」である。これでは「わがはい」の shades of meaning はとても表現できまい。「僕は猫です。おれは猫だ。わたしは猫です。あたいは猫よ」みな “I am a cat” である。英語では女性だけが用いる語・句・表現はごく少数に違いない。very<sup>1)</sup> の意味で so を用いた So lovely! の表現はこれに該当するであろうか?

「おれと言わないで、ほくといいなさい」この文を英訳するのは苦心を要する。英語の小説中、男女の会話がつづくと、He says...., says she などと挿入しなければ男・女どちらの言葉か不明となる。日本語では(翻訳でも)この必要はない。「君行ったの?」「ええ、まいりましたの。」のような短文でも十分わかる、混同はない。

4 職業語; 階級・教養の特殊な社会の言葉(つかい)。隠語(cant, argot, jargon, lingo)

宮廷語, 女房語<sup>2)</sup>, 学者語, 武士語, 町人語, 奴ことば<sup>3)</sup>, 軍隊語, など。

5 学術専門語(technical terms)

6 特別な場合の言葉。例, 忌詞(いみことば)

上のうち本稿に関係のあるのは(1)の階級方言とか(4)の階級(上流)の言葉などである。

## 2

Ross は論文の最初の部分で次のように述べる。

It is solely by its language that the upper class is clearly marked off from the others. In times past (e.g. in the Victorian and Edwardian periods) this was not the case.

今日(1956年)では上流階級の人の中流・下層階級の人と比較して必ずしも教育が高くもなく、清潔でも金持ちでもないという。

Nowadays it is difficult to distinguish U and non-U by the clothes they wear. U girls and shop-girls alike wear miniskirts.

区別が以前よりは困難とはいいながら、その外見や行動で判定することができるとする。U に属する人々が、たとえば jeans を着用すると、たとえ汚くとも、完全に U なのである。

住宅についていえば、入ってみて乱雑な印象を与えてもリラックスな感じ(feeling of relaxation)があれば U である。U people の住宅の位置はロンドンの一定の地区か、“the country” であって、suburbs にはない。Birmingham や Leeds のような

1) cf. very (U); ever so (non-U) (Ross)

2) 昔の宮中に仕えた女官の言葉(court-lady language) 例, かもじ(髪の毛; 母, 妻), くもじ[く文字](酒, など), ゆもじ(浴衣), むらさき(醤油), 青物(野菜), 比較, おひや(水)((婦人語)), おひろい(歩行)((尊敬語)), 同じ女性語でも「郭詞(くるわ)ことば」(例, ありんす)は特殊な社会(遊女)の言葉である。

3) 武家に仕えた奴などが用いた乱暴な言葉(下層階級の男性語), 例, ひやっこい(冷い)

provincial town には住まない<sup>1)</sup>。

食物, 食事, table manners の U と non-U

If you eat salad for lunch or dinner you are probably upper class. Raw tomatoes and carrots are the mark of a high social class. But serve potatoes only without vegetables—and your lower-class origins are showing.

この英国の新聞 Daily Express (1968 年) に示された階級の上・下の差別は外国人にはわからない。fish and chips のような食品は売っている店を見ても庶民的な食物であることは見当がつく。

食事の際の “Pass the cruet, please.” は Ross は very non-U ときめつける。cruet そのものが non-U である。紳士のテーブルの上には salt-cellars, pepper-pots, mustard pots など別の容器が置いてある。U-expression は I wonder if you could pass the salt [pepper, mustard], please? のような表現である<sup>2)</sup>。May I pour you a drink? Shall I pour? ((at tea)) Will you have a whisky? どの言い方も non-U で, U は Will you have some whisky? という。

また U 族はひるに lunch (luncheon は旧式の U), 夜は dinner をとる。non-U はひるに dinner をとる。“evening-meal” は non-U。

行儀, 作法, etiquette などは外国人には常識程度しか理解できない。同国人でも階級が異なると勝手がちがうことが多いらしい。そういうことを教えるもの, 例えば Emily Post<sup>3)</sup> の etiquette-book などがあるが, そういう本を見て etiquette を学ぶ(必要がある)ことがすでに non-U だという。U 階級に生まれ, 子供のときから U 社会<sup>4)</sup> で育ったものが初めて真の U になれるのだ。

### 3

non-U speaker は U-speaker になれるか?

どうしたら “change one’s voice” が可能か? 成人は完全な成功は望めない。子供をまず preparatory school へ, 次によい Public School へ送れという。それからはもちろん Oxford, Cambridge (“the Universities”) で学ぶコースをとる。この方法が一世

- 
- 1) In London, Mayfair, once so very U, is still so in some sort, but few people live there as it is so expensive. Perhaps Kensington is the London area most thickly populated with U. 外国人の居住が増加すると, non-U-ness も増大するという。The name of the house is itself an indicator. U houses have simple names that mean something, non-U ones fancy, made-up names. (Ross)
  - 2) An Englishman is thoughtful about his fellow-diners, and will pass the salt, pepper and mustard without being asked. This concern for others, possibly complete strangers, at one’s own table is the distinguishing mark of a well-bred person. (James Kirkup: *The Voice of Britain*)
  - 3) Emily Price Post (1873?-1960) U S writer on social etiquette.
  - 4) この階級の人には hunting を大いにやる。しかし成り上がり者 (parvenu; nouveau riche) が U になるためにやるべきことと考えられている (日本のゴルフも同じ。) So, today, hunting is not ipso facto a class-indicator. (Ross)

紀以上の経験から非常に効果的だと認められているのである。

いわゆる“Oxford accent”という発音は Oxford 大学特有のものではない。上述の教育コースを通った典型的な U の発音である。語尾 [文尾] の [-ə] を、もっと開いた明瞭な母音にするのはその一特色である。B. B. C. の announcer の発音 (規格化されよく訓練された発音は NHK のアナウンサーの放送日本語を思出させる) はくせのない標準的なものだが、これは U か、U にごく近い発音型であろう。

Cockney のように、語頭の h を落したり、[ei] を [ai] にするような発音が non-U であることは容易に推察できる。girl の母音を [æ], [ɛə] などとするのも同じ。ただしこれらの variant は今はなくなったといわれる。

中流・下層階級から「上流社会へ入ろうとする人」は U 表現を熱心に習う<sup>1)</sup>。U の言葉は elite が成り上がり者が入るのをふせぐために発明した合言葉 (password) のようなものだ。non-U がそれを覚えようと努めればつとめるほど、U 人種は言葉を変えたり、なぞのような句をあみ出したりする。newcomers が自分たちの仲間に入ることを拒絶する。non-U が「上品な」言葉を覚えて使い出したころには U はもとの平凡な語句に戻ったりする。

#### 4

Ross 教授は第2の論文では (1) Language (2) Actions の2部にわけ、第1の論文ではこの (1) を中心にして、The Written Language と The Spoken Language に分類して記述する。前者では手紙の書き出しのあいさつの文句 (salutation), 結びの句, 封筒の address, 名刺の名, などの書き方の U と non-U を述べる。

一例をあげる。手紙の初めと終りの U-rule は甚だ厳格であるという。(Dear) Sir (これは筆者が U でも non-U でも、未知の人あてのすべての business letter の書き出し) に対しては Yours faithfully (面会希望のとき, Yours very truly) と結ぶ。Dear Mr. X で書き始めた知人は Yours very sincerely (very を消すともっと cordial) とサインする。よく知る人に対しては Dear A [Christian name], または Dear X, 結びは Yours ever, どちらを使うべきかきめかねるときは単に Yours と書く, などと説明する。

以下には Ross 教授の説明を中心に vocabulary (若干の単語) と、発音の U と non-U を述べることにする。

#### 5

**card** [名刺] 普通の U-word は “card” であるが、playing-card (トランプ) との混同の可能性があって、ambiguous である。「名刺入れ」は “card box; card case” を用いても同じ恐れがある。フランス語からの借用語 “carte (de visite)” は U-word であっ

1) ‘U’ expressions, required knowledge for “ladder-mounters,” are eagerly studied. (Pearl Binder: *The English Inside Out*)

たが、もうとりにすたれた。card の代わりに calling-card [visiting-card] を用いるのは non-U である。しかし「名刺」についての言語上の問題はすでにすたれたとってよい。現代の若い世代の人は名刺を用いる習慣がないからだ。

#### table-napkin, lavatory-paper

両方とも U expression である。non-U はもっと上品ぶった言葉、気取った舶来語 serviette<sup>1)</sup> と toilet<sup>2)</sup>-paper を用いる。形容詞にしても、U はそのものずばりの “mad” を用い、non-U は遠まわしの表現 “mental” にする。

#### wireless (U), radio (non-U)

ただし専門語としては radio を用いる。Ross は後の論文でこの label を取消した。「ラジオをきく」などの表現で “radio” を用いるのは米語用法であったが、今は “radio” は日常生活で多く用いられるようになり、non-U ではなくなった。

#### lounge (non-U)

U-speakers は自分の家の一室を “lounge” といわないで (hotel のはもちろん “lounge” である), dining-room, hall などを用いる。

(注) “Sitting-room” is the word used by parents (workers) whose ladder-climbing children are careful to use the word “lounge” (middle middle class). When these children get a few rungs higher they will find “sitting-room” is more acceptable again. (Pearl Binder)

#### Excuse my glove<sup>3)</sup>

(old-fashioned?) non-U この句に対する Ross の説明は痛快である。男性 (女性はそのままだ?) の U-speaker は手袋を脱いで握手をし、弁解の言葉は何も言わない。

#### if you don't mind my mentioning it (non-U)

相手が気にするような恐れがあるときは最初から口に出さないのが U であろう。

#### Shall we wear evening dress? (non-U)

適当な U-expression は Are we going to change? “evening dress” は招待状にしばしば用いられるが、U-speaker の間ではあまり用いられない。少なくとも、男性にとってはこの語はあいまいだ。

- 
- 1) perhaps the best known of all the linguistic class-indicators of English (Ross) Never use the word “serviette,” which is a middle-class genteelism. (James Kirkup: *The Voice of Britain*)
  - 2) Bourgeois terror of naming anything suggesting the natural functions leads to the word “toilet” meaning something else. (Pearl Binder) non-U の人は “water closet” を避ける。
  - 3) It is not well-bred to say such a thing. A well-bred person shakes hands with his gloves on if he happens to be caught in that situation, but without drawing any unnecessary attention to such an unimportant circumstance. Even more genteel is the phrase “Pardon my glove.” (James Kirkup)

**horse-riding** (non-U)

U は単に riding という。non-U 族にとっては riding は色々なものに乗ることだが、U は「乗馬」だけを意味する。

**wealthy, perfume** (non-U)

U はもっと普通の rich, scent を用いる。このようなあまりに細かい区別は私たち外国の学徒には参考にならない。こんなことに抱溺してはいよいよ話せなくなり、書けなくなる。ただし U 人種の気持がわかって興味がある。non-U の coverlet, corsets, mirror, couch [settee] に対する U の counterpane, stays, looking-glass, sofa も類例である。

## 6

**ate** [eat の過去形] 英国発音では [et] が多く、米語発音では [eit] が多い。米国南部では [et] も用いられる。Kenyon 発音辞典<sup>1)</sup>によれば “occasional in cultivated South” である。

(注) [et]—a social shibboleth to many speakers—turns out to be the socially elegant form in Charleston, South Carolina, where the use of [et] (and of “ain’t” in informal speech) sets off those who belong to the best Charlestonian society from those who would like to belong but don’t.<sup>2)</sup>

英国の伝統が強く保守的な米国南部の上流社会では [et] の発音が社会的地位を特色づけている。この発音は南部以外の地域では特殊階級・団体の合い言葉として考えられ、特別な目で見られる原因となり得る。

**vase** (花瓶) 英 [va:z], 米 [veis]; 米には [veiz] もあるが、ずっと少ない。Colby<sup>3)</sup>によれば “obsolescent” であり、このほかにも [vɔ:z] もあるという。New England や南部 (Old South) では英国の風習がたつとばれ、英国の発音型 (Received Pronunciation) がしばしば local cultured speech に採用されている。そのため、この [va:z] の発音も prestige をもつと期待されるのであるが、spontaneous pronunciation としてはまれである。「花瓶が3ドル以上なら、[va:z] と発音される」などといわれることがある。そういう発音をするのはにわか成り金、成り上がり者であって、上流社会に入りこむことができたことを喜び、この発音を覚え、それを使用して隣人たちに自分の立身出世、地位の向上を印象づけようとするのである。一種の prestige pronunciation である。

**ewe** (雌羊) [ju:] Kenyon によると、この語の発音の historical variant である [jou] は米英ともに羊飼育人の間では今でも普通に用いられる。これは occupational pronunciation で、もちろん non-U である。類例は kiln (旧つづり, kill) [kiln] 「かま, 炉」,

1) Kenyon, Knott 共著, *A Pronouncing Dictionary of American English* 音声表記は I. P. A. 方式に変えて、統一した。以下みな同じ。

2) McDavid 論文 (既述)

3) Frank O. Colby: *The American Pronouncing Dictionary of Troublesome Words*.

falcon [fɔːlkən] 「たか」, caisson [kéisn] 「水中工事用の箱」, ferrule [féru:l] 「石突き, 口輪」, trough [trɔ:(ɪ)f] 「こね鉢」<sup>1)</sup> は製陶業者, たか師, 技術家 ((英)), 傘業者, ぱん屋などの専門家・業者の発音では [kil], [fɔːkən], [kəsú:n], [férəl], [trau, trou] となる。

bleat (羊・やぎ・小牛のなき声) の米国での発音は北部では一般に [blæt] で, 南部では [bleit] である。[bli:t] はほとんど “city pronunciation” である<sup>2)</sup>。

suit Jones によれば英では [sju:t] が普通で, 次に [su:t] の発音が行われる。米国では [su:t] が最も普通の発音である。以下 Colby<sup>3)</sup> の説明。

In unaffected American speech, [ju:] hardly ever occurs after [s] and [z].

McDavid の解説では, suit, blew, threw 等の母音を [ju:] とすることは英国では social prestige をもつかも知れないが, 合衆国では “extremely rare” であり, ほとんど北部 (この場合 New England 地域をさす) だけで用いられる。たいていの米国人はこの種の発音を “unnatural and affected” と感じる。

negro 教養のある英米人, 特に (使用の機会の多い) 米国人はこの語を用いないで, 黒人自身が使うことを好む “colored people” を用いる。この語は黄色人種なども含む漠然とした, あたりさわりのない言葉で, たしかにぶしつけではないであろう。“negro” は使用する人の地位や態度を示すばかりでなく, 黒人自身の反応をも示す語である。McDavid は次のようにいう。

Sometimes the pronunciation of a word may involve a number of intricately related cultural, historical, and political facts.

一つの単語の発音だけでも文化的歴史的社会的な種々な背景をもつものであり, その最も複雑な例の一つが “negro” である。

“negro” の歴史的発音は [nígər] である (nigger と綴られる)。これが米国では断然多い発音で, 多くの communities において男性・女性両方によってごく普通に話される。しかし多くの人はこの語が term of contempt であり, 黒人たちが最も嫌悪する語であることを知っている。綴字発音 [ní:grou] は比較的新しく生まれたもので, polite な発音とされ, 英国ではこれがほとんどただ一つの発音型である。米国でもたいていの教養のある人もこれを用いるが, 南部では教育ある人の間でも [nígrə] が普通の発音である。Colby もこれを認めている。南部発音では強勢のない音節 (unstressed syllable) では [ou] より [ə] を用いる傾向が多い。また北部で用いる [ní:grou] に対する反感・偏見もある。南部の教育ある人は [nígər] を用いない。これは南部の貧しい白人 (poor whites) の用いる言葉であり, 黒人を侮辱する言葉であると感じているのである。南部における [nígrə] と [nígər] の差異, その文化的・社会学的の意義をはっきり認識することが必要である。これは南部以外の人には, たとえ米国人でも, なかなか理解しがたい問題である。

greasy この s を [s], [z] と2種に発音することは米国の地域方言の代表的区別の例

1) 類例 leap [lep] ((馬術)), fount [font] ((印刷)), leeward [lǰú(:)əd] ((海))

2) McDavid

3) 逆に言えば, [su:-], [zu:-] は米国では (affectation) 「気どり, きざ」の発音である。



によく引用される。北部ではいつも [grí:si] であり、南部、そして (Colby によれば) 西部でも [grí:zi] が多く用いられる。South Carolina と Georgia 州では、[-s-] は黒人 (Gullah Negro) の間で用いられるが、白人間ではほとんど全く用いられないといわれている。南部では [grí:si] は non-U であることになる。意味によってこの2種の発音を区別する人もある。Kenyon によれば [grí:si] は “covered with grease [grí:s]” 「油[獣]脂を塗った」であり、[-z-] は slimy 「ぬるぬるした、すべすべする、べとべとの」である。これは英国の用法にも当てはまる。Jones はこの区別を詳細に説明する。[-z-] は “slipperiness caused by grease” である。だから、このように区別する人にとっては、candlestick は [grí:si] (covered with candle-grease) であろうが、必ずしも [grí:zi] とは限らない。これに反して道路は [grí:si] でなくても、[grí:zi] であり得る。

**catch** この発音が [ketʃ] となれば、non-U であり、substandard あることは外国人である私にも推量できる。少くとも英国ではそうだと断定できよう。米国でも C.C. Fries<sup>1)</sup> など多くの学者は同意見である。[-e-] は「prestige に欠ける」と判定する。Bender<sup>2)</sup> は [-æ-] をすすめ、Lewis<sup>3)</sup> も [-æ-] だが、“also regionally” として [-e-] を付記する。Kenyon も “not infrequent” として [-e-] をつけ加える。McDavid は [-e-] が米国全国で最も広く現実に行われる発音であるとする。

[ketʃ] is overwhelmingly the normal pronunciation.

ただし New England 南部、Pennsylvania などでは [kætʃ] が “majority usage” である。U-speaker は当然これを用いる。Virginia 州ではこれが prestige pronunciation で、教育ある階級を示すものであり、non-U の人々は少数しか用いない。

**bar, barn, burn, beard** “loss of [r]”

英国では北部で、米国では General American で上のような語で語尾と子音の前の r を発音する。英国の Received Pronunciation と、米国の東部・南部地域発音では r を発音しない。すなわち loss of [r] が生じる。eastern New England, New York City, South Atlantic States など多くの地方では若い世代の人、教育ある人にはっきりこの特色が表われる。黒人発音もこの種の r を発音しないのが一つの特色となっている。この地域では田舎者と無教育の白人 (unsophisticated whites) が r を発音する (r-coloring をもつ)。

## 7

England では Derby, Berkeley などの母音 [ɑ:] を [ə:] で発音するのは non-U である。forehead [fó:rid], golf<sup>4)</sup> [gɔf], medicine [médsin] などを [fó:hed], [gɔlf], [médisin]

- 
- 1) American English Grammar
  - 2) *NBC Handbook of Pronunciation*, originally compiled by James F. Bender for the National Broadcasting Company, revised by T.L. Crowell, 1943
  - 3) Norman Lewis: *Dictionary of Modern Pronunciation*
  - 4) [gɔf] まれ (Jones)

と発音することも同様だ。これらは次第に多くなる傾向にあると思われる綴字発音<sup>5)</sup>の例であるが、この点 U-speaker は伝統の発音を固守して、新傾向を認めないらしい。U-speaker の保守主義はここでも明白である。handkerchief [hæŋkətʃɪf] は [-tʃi:f] よりも U とされる。

really [rɪəli] を [rɪ:li] のように、発音すること、yesterday を yésterdày (第1音節だけに stress を置くのではなく、第3音節にも stress をおく、すなわち第2次強勢を強くする発音) のように発音することは non-U であるとする。[rɪ:li], [jéstədéi] は米語式発音であるから、vocabulary の場合と同じように発音でも米国的なものを好まない傾向が見られる。誇り高い英国人はアメリカ英語(発音)を distorted English として見下しているのだ。

### hotel, humour

Ross によれば、語頭の [h] をおとすことは “old-fashioned U” である。hotel は米国の辞書では [h] のない発音を記してない<sup>2)</sup>。Jones によれば、いつも [əutél] を用いる人もあり、または時折(文頭にないときに)使う人もある。humour [hjú:mə] の variant [jú:-] は “old-fashioned” とする。Kenyon によれば h のないこの発音は “sense of humor, mood” の意味と動詞で用いられることが多い。

### O. K.

一時 U-speaker, 特に若い人たちが、slang をさかんに用いた時代があった。現代では slang を多く使うことは non-U とされる。特にアメリカの俗語はきらわれる。“O. K.” はただ一つの例外であろう。

## 8

言葉そのものも non-U から U へ、pejorative から ameliorative へ、またその反対の方向への微妙な変化がある<sup>3)</sup>。

“joke, banter” などは最初は slang term であった。Dr. Johnson は “clever, fun, job, width” など、みな “low” だと非難した。以前の non-U は現在 U に昇格している。“O. K.” のような Americanism を嫌う人もあるが、もはや non-U ではない。

私たちは vocabulary や発音の現在の正確な social status を可能な限り知るよう努めたい。「外国人だから non-U でもしかたがない」の段階から「外国人としては最高の U-speaker, U-writer」の段階まで前進したいものである。

(1969年9月)

- 
- 1) Spelling Pronunciation, 参照, 拙稿「綴字発音」横浜国立大学記要, 3号。
  - 2) an hotel ((Briticism)) (Random House Dictionary)
  - 3) subtle movements of words up and down the social scale (Stephen Ullmann: Semantics, ch. 5)